



# 仲間と母のために 思い、バットに乗せ奮闘

## 2年で唯一の小淵選手 メンバー入り

八戸学院光星高の左翼手・小淵智輝選手は、2年生で唯一のメンバー入り。仲がいい同級生の思いを受け止め、女手一つで育ててくれた母への感謝を胸に、甲子園の舞台に立つ。9日の初戦は六回に貴重な追加点となる適時打。「もっと打ちたい。みんなのために」と奮闘する。

強打の光星で7番打者を務める小淵選手。同級生として切磋琢磨する小池智也選手のバットと打撃用手袋で、打席に向かった。

## 光星 甲子園初戦突破

甲子園の登録枠は18人で、青森県大会より2人少ない。小淵選手を含め、青森大会で一緒に戦った2年生の「戦友」2人がメンバーから漏れた。

「2年生が1人でやるのはさみしい。沈んだ時期もあったが、小淵選手の用具を借りて、気持ちを切り替えた。俺たちの分も頼んだぞ」「任せておけ」。思いを託され、今は強い決意をみなぎらせる。奮い立つきっかけを与えてくれたのは母の江美さん。

夏の甲子園に2年ぶりに登場した八戸学院光星高の初戦は、地元・兵庫県代表の市尼崎が相手の「アップウェーゲーム」となった。延長

## 「よく踏ん張った」



小林直輝選手の勝ち越し適時三塁打に沸く三塁側アルプススタンド。八戸学院光星高の応援団も声援を送った

十回までもつれた接戦の末、もぎ取った大きな1勝に、三塁側アルプススタンドで声をかした応援団は、歓喜の渦に包まれた。

「よく踏ん張った。地方の差を見つけた。苦しい戦いを勝ち抜いたナインの健闘をたたえ、優勝への期待を募らせた。

スタンドには、野球部員や選手の家族ら500人以上が詰め掛けた。試合は中盤まで点を奪えず、先制された1点を追う展開。主戦櫻井一樹選手の父・久信さん(39)は「インコースを攻めるいつもの投球で踏ん張ってほしい。マウンドに立つわが子の姿を、手に汗握って見守った。

六回。この日、重ねて好機を演出していた田城飛翔選手が本塁打を放つと、それまでの歯がゆさを吹き飛ばすかのよう、応援団は大爆発。突き放せ「続け」。声援が熱を帯びた。

この回奪ったのは4点。勝ち越し打を放った小林直輝選手の母・美由紀さん(56)は「いい場面で打ってくれた。ここ。」「見るとに成長を見せてくれる」という息子の真姿に目を細めた。



メカホンを打ち鳴らして初戦突破を喜ぶ八戸学院光星高の生徒たち。9日午前10時15分ごろ、八戸市

ん(46)だった。大会前に電線で弱音を吐くと、「みんなの分もチームのために買った。いつかプロになりたい」と諭された。

甲子園を目指して、東京都内の中学校から光星に進学。経済的にも精神的にも、遠く離れた場所を夢を追いかける自分を支えてく

「お世話になってる先輩方にプレーで返してほしい」。江美子さんはこの日、息子の晴れ舞台をスタンドから見守った。

5打数1安打1打点で、持ち前の勝負強さを発揮した小淵。試合後は「取りあえず一本出て良かった」と安堵の表情を浮かべた。だが、仲間と母の期待に応えるためにも、まだ満足はできない。

(林泰輔、上野貴裕)

信さんは「打たせて取る野球で勝ってほしい」、田城選手の父・大輔さん(45)は「自分たちのプレーで楽しんで」とエールを送った。

次戦は大会屈指の投手を擁する東邦(愛知)戦。久

(上野貴裕)

## 留守部隊も歓声 八戸

八戸市の八戸学院光星高で9日、生徒や教職員計約1100人が、校内のオープンスペースに設置された大型スクリーンで市尼崎(兵庫)戦を観戦。黄色いメカホンを打ち鳴らし、延長の末の初戦突破を喜んだ。

サッカー部の1年木村尚貴さん(15)は「ピンチの場面はドキドキしたが、勝ててうれしい。2回戦も絶対に勝ってほしい」と期待を寄せた。

橋場保人校長は「相手は激戦区の兵庫県代表。そう簡単に勝てる相手ではない」と思っていたので、ほっとしている」と話した。

球場で初戦を応援した3年生ら2605人は、10日に八戸に戻る予定。13日に八戸を離れる。14日の東邦(愛知)戦に向けて学校を出発する。

(瀬戸麻理乃)